

段玉裁におけるいくつかの助辞について

大橋 由美

本稿は、いくつかの所謂助辞（虚辞とも）につき、漢字本来の構成即ち字形と本義を明らかにした上で、それがどのような意味をもつ助辞として用いられるかということについて、少しばかり考究しようとするものである。従って、文字が本来もつ三属性、つまり形・音・義につき解き、その用法をも説いた『説文解字』（AD 100年成る。『説文』と略す）及びその秀れた注釈書である『説文解字注』（段注と略す）に拠って、これを試みる。

そもそも、後漢の許慎が著した『説文』は所謂六書を以って文字を解説した初めであるが、当時のままの面目を伝えるものは現存しない。そこで、清朝に至り考証的な学問態度によりその面目を復元して創業を受け継ぎ画期的な業績を挙げ独特の文字説を展開したのが、段玉裁（1735－1815）である。段注は畢生の大著と稱される。その永きに亘る著述過程に於ては、全九千三百余字に注釈するために要した「根拠」は、ただ經学のみならず真に広範囲に及び歴大なものであったこと、また、その収集に多大な時間や努力が欠かせなかったであろうことも想像に難くない。段注の随所に、当時の交流のあった一流の学者たちの学説が引かれている事実も、これを示唆するものである。師承にかかわる人々の説のみ用いるに止まらないこのような独特の学問研究態度が、往々にして段説に大きな影響を与え、学説を改めることもあることは、段氏文学説の変遷を考える上で興味深いことである。

段氏の刊行された著作は、ただ六書音均表や段注だけではない。經書の『詩』には『詩經小學』・『毛詩故訓傳』が、『書』には『古文尚書撰異』、『周禮』には『周禮漢讀考』があり、文字の三属性全般に亘る著述であることがわかる。そして、勅撰の十三經注疏の編纂の任には当らず名は連ねてはいないものの、その説は『詩經』『尚書』などの各条（校勘記）に、例えば「段玉裁云……」としてしばしば引かれ高く評価されていることも衆知の事実である。

従つて、このような段氏の著述を広く参考にし、最終的に成つた段注に認められる文字説の、その成立過程或いはその展開（変遷）に特に注目しつつ、助辞説の一端を探ることとしたい。四画の勿・方・毋・比を読む。本稿に於る各助辞訳出の凡例は次のようにする。

⁸³_{上b}は、八篇上三葉ウラ、その下に当該助辞を楷書、篆文の順で示す。A…は所謂重文で別体の字。

①・②…は、段注で区切られた所謂説解の段落。その①・②…ごとに付けられた段注を訳出する。

1. ⁹³³_{下b}勿 (勿)

①州里で建てられる旗。

②其の柄に象る。

③（その柄に）三本の游がある（さまに象る）。
たなびくはたあし

④襍帛（大徐・小徐の二徐は「雜」に作る）。幅は半ば異なる。

⑤民を趣するためである。

⑥故に「遽（いそがせる・あわただしい）」は「勿勿」^{フツフツ}と併う。

⑦凡そ「勿」の属は皆「勿」を構成成分としてもつ^{ハ・V}。

A 糝 ①「勿」は或いは「𠂔」を構成成分としてもつ。

〔段注〕

①九旗の一つである。「州里」は当然「大夫士」に作るべきである（即ち「①大夫士の建てる旗」）。（なぜなら）『周禮』春官「司常」に「大夫士建物、帥都建旗、州里建旗」とあるからである^{△2v}。（また）許慎は^{7上b}「旗」条下で既に「州里建勿」と稱つてしまっているからだ。よつてつまりここでは「大夫士建勿」と稱うのがきつと果すべきことなのであるが、（しかし）説解がそうなつてはいないのであるから、多分またもや一時の筆のあやまりであるだけであろう。

また、『周禮』「大司馬」は「郷家載物」で注は「郷家、郷大夫也」、（『儀禮』）「郷射礼」は「旌各以其物」注では「襍帛爲物、大夫士之所建也」、（『儀禮』）「士喪礼」では「爲銘各以其物」注では「襍帛爲物、大夫之所建也」（按勘記は「上述「司常」注を引き「士」があるべきという」とあるからなのだ。文弗切（ブツ）。15部。

（上記三例でみたように「はた」の意の場合）経伝では多く「物」に作る^{△3v}。そして、「勿」を假借して「母」字とする。また同様に借りて「沒」字とするものもある。

（また、『禮記』（「礼器」）「勿勿乎其欲其饗之」では、「勿勿」は他でもない「沒沒」^{ホツホツ}であり、丁度「勉勉」^{ベンベン}のようである。（②右の筆画（フ）をいうのである。

③「𠂔」^{9上b}（^{18b}）をいうのである^{△4v}。「三游」は「旂」^{7上a}（^{17a}）の九游、「旗」^{16b}（^{16b}）の七游、「旗」^{15a}（^{15a}）の六游、「旐」^{15b}（^{15b}）の四游に別なる^{△5v}。

④（文意が）句切れる。

⑤（『周禮』）「司常」は「通帛爲旌、襍帛爲物」で注をして「通帛謂大赤、從周正色、無飾。襍帛者、以帛素飾其側、白、殷之正色。凡九旗之帛皆用絳」という^{△6v}。

按ずるに、許慎が「幅半異」というのはただそのまま「正幅は半ば赤、半ばは白」といういみである。(一方)鄭玄はというと、つまり「以素飾側」といい、『釈名』(釈兵)はといえば「以襍色綴其邊爲翹尾」という。(このように)説は各々同じではない。(しかし)許慎が長つて(まさ)いることになるようである。

⑥「趣^{シヨウ}」とは「疾也^{シツ}」である^{ハ7V}。色が純(まじりけなし)であれば「緩^{ゆるやか}」であるが、色が駁(ぶち)であれば、「急^{せわし}」い。故に、襍帛は民を促かすため(の手段)である^{ハ8V}。

⑦「遽」は『韻會』(五勿)に引く『説文』では「亢遽」^{ハ9V}の二字に作る。「併」は旧くは「稱」に作るが今正す^{ハ10V}。凡そ「亢遽」は「勿勿」と併うが、これは引伸假借である。「子」^(14下24)下で「十一月陽氣動^{ママママ}。萬物滋。人以爲併」というが、同様にここもその仮借の例である^{ハ11V}。

A ①経伝では多く「物」に作るが、多分(この或体)「旂」^{なまり}の訛である。

〔注〕

1. 「勿」は359番目の部首で、段注は何もここでいわない。九篇には46部首を収め、その36番目に当り、所属字は「易」一字であるのは「勿」の「開展する」意を取ったのであろう。「勿」の前358番は長(喬)、後360番は井(井)・370番而(而)と続き、段注は各条で「前の部首を蒙けない」という。よつてここは、注がないのは前後と無関係ではなく、「ながい毛・たれる・ひげ」のように、形の系聯よりむしろ義の系聯により続くといえよう。尚、意味上の「はた」部は「𦘒」部で、七篇234番に「方^{ふね}」・「軌^{はたさお}」を蒙け別に建つ(「方」条参照)。

2. 『周禮』春官「司常」職は天子の常^{はた}を掌る。まず、「司常掌九旗之物名、各有屬以待國事。日月爲「常」、文龍爲「旂」、通帛爲「旟」、雜帛爲「物」、熊虎爲「旗」、鳥隼爲「旟」、龜蛇爲「旐」、全羽爲「旖」、析羽爲「旛」と國事にそなえるた

めにある各々図柄がある「はた」九種が記されている。その鄭注は、「物名者所畫異物則異名也。屬謂徽識也」につづけて、「…王建大常、諸侯建旂、孤鄉建旛、大夫士建物、帥都建旗、縣鄙建旐、道車載旛、旂車載旌」とあり、その鄭注は「…大夫士雜帛言以先王正道佐職也。帥都六鄉六道六大夫之、謂之帥都。都、民所聚也。…」という。

なお、「帥都建旗」の校勘記では『漢讀考』云「として」：『說文』「旂」部引『周禮』「率都建旗」、作「率」者故書、作「帥」者今書也」を引き、賈公彦も鄭注同様誤って「帥都」として説くとする（この条後注参照）。

ただ、この校勘記が引く『周禮漢讀考』は「司常」「帥都鄉遂大夫也。都、民所聚也」に付けられ次のようにある。

案此經注「帥」字、今本皆誤作「師」。賈『疏』且云「師、衆也。都、聚也」。主鄉遂民衆所聚、故謂之帥都、則其誤在唐以前矣。阮注意正謂鄉遂大夫帥領民聚之都。「大司馬」「帥都載旛、鄉家載物」注、「帥遂大夫、鄉家大夫也」。今本誤亦同唐以前俗字、「帥」作「師」、故誤爲「師」耳。『說文』「旂」部引『周禮』「率都建旗」、作「率」者故書、作「師」者今書也。見「樂師」「聘禮」注亦曰「古文「帥」皆作「率」」（この条も後述参照）。

このように、段氏は字体の異同を、時代による変化（異同）とみなし、「故書」、「今書」という表現でしばしばあらわす。なお二徐の「雜」でなく「襟」をとつたのは、以上に見える「司常」およびその注に明らかに拠つたためである。また、同様な例は「燕射」の「帥射天以弓矢舞」注にも見える。

案…「率」與「帥」則今人混用而漢人分別。帥領之義、必用從巾自聲字也。是以司農以漢時字例正之、二字古音本同。『毛詩』「率時農夫」「韓詩」作「帥時農夫」、『周禮』「帥都建旗」（今『周禮』譌「帥都」）、『說文』「旂」都引作「率都建旗」「聘禮」注曰「古文「帥」皆作「率」」。凡『周禮』「帥」字、故書當作「率」而獨此言之者、欲讀者互訂。

と各条で同じような注を繰り返すが、その真意は最後に最も認められるであろう。

3. ①『周禮』夏官「大司馬」に

「辨旗物之用、大載大常、諸侯載旂、軍吏載旗、帥都載旛、鄉遂載物、郊野載旐、百官載旗、各書其事與其號焉、其他皆

如振振。」

とあり、その鄭注は、「郷遂、郷大夫也」とある。また、校勘記は「唐石經原刻作「遂」、後磨改爲「家」。按賈『疏』是「遂」字。『漢讀考』云「此當從石經作「郷家」、假令是「郷遂」、則注不得云「郷太夫」也。」とやはり『漢讀考』がかりにたしかに賈公彦のように「郷遂」であれば、鄭注が「郷大夫」といえないであろうという説は表面上支持していないようにみえる。これでは校勘者に理解の上で矛盾があるというべきではなからうか（前注2参照）。

②『儀禮』「郷射礼」

凡適堂西、皆出入于司馬之南、唯賔與大夫降階、遂西取弓矢。旌各以其物。

注 「旌」、總名也。雜帛爲物、大夫士之所建也。言「各」者郷射、或於庠、或於謝。

疏 釋曰「旌、總名也」者、以『周禮』「司常」云「九旗」對文。通帛爲旌、雜帛爲物、全羽爲旐、析羽爲旌、各別今名、物爲旌者教文、通故云「旌、總名也。」…（以下「司常」を引き説明する）

③『儀禮』「士喪礼」

爲銘各以其物、亡則以緇長半幅、經末。長終幅、廣三寸、書銘于末曰「某氏某之柩」。

注 「銘」、明旌也。雜帛爲物大夫之所建也。以死者爲不可別、故以其旗識、識之愛之斯錄之矣。……

校勘記 「夫」下『通典』「釈敖氏」俱有「士」字。按據『周禮』「司常」注則「士」字當有。

以下一貫して「郷家」つまり「郷大夫士」であり、それが建てるのが「物」即ち「勿」であると説く。その根拠は常に『周禮』「司常」で、また段注・『漢讀考』の説であるといえよう（①の校勘者の立場は依然として不明瞭）。

4. 勿・物・母・没、勉については假借の關係にあるとするので、まとめて述べる。

①^上_{2 10 a}物「一萬物也。牛爲大物②天地之數起於牽牛③故从牛勿聲」

①牛は物の大きなものである。故に牛に从う。…③文弗切（フツ）。15部。

②^{12下30a}母は、助辞であり詳細は本稿の同条を参照。

「①止之誓也②从女③女有姦之者、一禁止之、令勿姦也。……」

②會意である。武扶切（ブ）。5部。③……「禁止して姦させないようにする」は、古人は「母^ボ」といったが、それは今人が「莫^ボ」というようなものである。

③^{11上23a}没は一般に助字とされないが、段注から助辞と関るので訳出する。

「①湛也（深くはいる、しずむ）である②「水」を構成成分としてもち「𣶒^{ボツ}」がその発音。」

①「没」とは水に完全に入ることであり、故に引伸した義^{いみ}では「盡」（つくす・ことごとくす）に訓む。凡そ「貪没（むさぼる・よくふかい）」・「乾没（利益をむさぼる・たなぼた）」（の「没」は皆に「沈溺（おぼれる）」の引伸（のいみ）である。②莫勃切（ボツ）。15部。

④^{13下51a}勉も段注から助辞と関連することになるので訳出する。

「①勢也（しいる）②「力」を構成成分としてもち「免^ミ」がその発音。」

①凡そ「勉^ミ」とは、皆て対象に迫る意。よって（たとえば）「自勉」とは「自ら迫る」であり、「勉人」とは「人に迫（つてさせ）る」である。『毛詩』（十月之交）は「黽勉^{ビンベン}」で、「韓詩」は「密勿^{ミツフツ}」に作り、『爾雅』は「黽没^{ミツボツ}」に作る。「大雅」（文王）の毛伝は「𣶒𣶒^{ビビ}（熱心につとめるさま）、勉也」といい、『周易』で鄭注は「𣶒𣶒」は丁度「没没」のようである」とある。②亡辨切（ベン）。古音は当然13部に在る。

当条の段注が勿―勉―没の相関をよく示すようである。また『礼記』『礼器』によつてまた明確な三字の関連を認めうる。

。太廟之内敬矣。…郷大夫從君、命婦從夫人、洞洞乎其敬也。屬乎其忠、勿勿乎其欲其饗之也。…

鄭注 勿勿猶勉勉也。

孔穎達疏。：「勿勿猶勉勉也」言、中心勉勉乎欲望神之歆饗。

以上を要するに、

物 15 文弗切（微母 物韻入声）

母 5 武扶切（微母 眞韻平声）

沒 15 莫勃切（明母 沒韻入声）

勉 13 亡辨切（微母 彌韻上声）

勿 15 文弗切（微母 物韻入声）

勿は5部の母とのみ合音とならないが双声によって通じる。よって全て仮借といえる。なお、「物」とは全く同音による仮借であるが、他の三字では、「母」とは直接的に「禁止」の意で、「沒」「勉」とは引伸義の「はなはだしい程度」という義の上でも通じるといえる。

5. ^{9 上}_{18 b} ①毛飾畫文也（ふでで文をはらうようにえがく）②象形③凡𠂔之属皆从𠂔

①巾部に「飾」とは「𠂔也」というので、「飾畫」とは𠂔^{えが}つて畫くである。「毛」とは「聿^{ふで}」である。（^{3 下}_{21 b}聿で）また（方言で）これを「不^{フリツ}律」といい、またこれを「弗^{フリツ}」といい、またこれを「筆^{ヒツ}」といい、画く道具であるものである。（道具で画かれた）その文^{初期段階のもじ}はといえば「𠂔」となるのである。（^{3 下}_{16 b}又でいうように）（その用^{はたらき}からして足りる）手の列^{なうひ}は多くは略ぼ三つを過えない」ので（ここでも三つで画かれた文としては）「𠂔」をば象るのである。（このように）毛^{ふで}で飾い画かれた文^{もじ}が「𠂔」としてでき上る。「須」「髮」は皆に毛^{なかま}の属である。故に皆て「𠂔」の属であるとして「𠂔」を構成成分としてもつのである。②所銜切（サン）7部。

6. 「游」^{はたあし}とさまざまな「はた」をここにまとめる。「勿」以外の「はた」は全て「𣎵」部七篇に属す。

①^{7 19b}游「一旌旗之流也二从𣎵汙聲」

①…旗の游は、水の流れのようである。故に「流」と（いうよび名で）倂うことができる。『周禮』冬官「輶人」「大常十有二游、旂九游、旗七游、旗六游、旐四游」、『周禮』（司常）は「王建大常、十有二游、上公建旂九游、侯伯七游、子男五游、大夫士建物」であり、その游については各々命じられた数が視かる。…（『周禮』夏官）「節服氏」では「六人維王之太常」で注は「王旌十二旒、兩兩以纁綴連、旁三人持之」であるので、つまり旗の制では游の属は兩旁で十二游であるものは片旁で六游である。九游ならば兩旁は（各々）一方が四、のこる一方が五である。已下は（同様に）知ることができる。

②以周切（イウ）。3部。この字は省略して「旂」と作り俗に「旒」と作る。『集韻』（十八尤）では「旂、亦作旒」という。

ここでみたように「はたあし」の数には異同がある。

②^{7 17a}旂「一旗有衆鈴二目令衆也三从𣎵斤聲」

この条は段注ともに「游」の数の記載はない。

③^{16b}旗「一錯革爲其上二所目進士衆三旗旗四衆也五从𣎵與聲六周禮曰州里建旗」

②に同じく「游」及びその数には言及しない。

④^{15a}旗「一熊旗五游、目象伐星二士卒目爲期三从𣎵其聲四周禮曰率都建旗」

①「五」は鄭本（『周禮』冬官）「攷工記」（輶人）が「六」に作るの、（説解は）「熊旗六游、以象伐也」である。「司常職」は「熊虎爲旗」（に続く「帥都建旗」の）注は「畫熊虎者、鄉遂去軍賦、象其守猛莫敢犯也」という。（また「輶人」の注で）「伐屬百虎宿、與參連體而六星」（である）。（以上のことから）按ずるに、（説解が）記して「虎」といわないのは、「熊」

を挙げて「虎」を包含させたからである。

従って「勿」の段注が直ちに「旗の六游」という根拠となる。このように、段注は当該「勿」条だけではなく、関連する注を交互参照して初めて総合的にくいことがうことなく理解できると改めてわかる。④も同様。

④^{15b}旐「①龜蛇四游、目象營室③攸攸而長也④从𠂔兆聲④周禮曰縣鄙建旐」

①「攷工記」(輶人)の文である。…注で「營室玄武宿、與東辟連體而四星、故旐四游」という。「營室」とは一名「水」である。…

以上より、旂・旗では同じ「はた」であつても游の数に触れないが、旗・旐の游数が「攷工記」によつて定まる。この二条がある故に、「勿」では直ちにその数を記すことが大いに可能となる。段注は正に一ヶ所だけでその説が完結するように尽されたものでは根本的になく、関連する注を交互に参照してこそ一貫した主張が明確になるという方法によつて記されたものであることを意味する。更に、^{7 17a}旐の段注で自ら「説解で「諸侯建旐」と偁わぬのは、(このことは他でも)同様に錯見する(かわるがわる見える)からである」ということから、段氏のこのような注釈態度は許慎の『説文』著述の態度に倣つたもの(即ち「体例」としてそうであつたと認めた)であることが推測される。

7.『周禮』「司常」は前注参照(但、「旐」に校勘記がある)。

鄭注に「…通帛謂大赤、從周正色、無飾。雜帛者以素飾其側、白、殷之正色。」のあとにつける羽のことを述べ「凡九旗之帛皆用絳」と結ぶ。

また、「旐」には校勘記が付き次のようにある。

『説文』「𠂔」部云「旐」、旗曲柄也。所以旐表士衆、从於丹聲。『周禮』曰通帛爲旐。又「旐」、「旐」或从「𠂔」。『説文』^{7 16b}「旐」の或体として^{19a}「旐」がある。^{7 18b}旐の段注は「③所以旐表七衆」下で「…皆展表士衆之義」といい『周禮』下では「色」について『爾雅』(釈天)は「因章曰旐」とあり、鄭玄は「因絳帛之文章、不復畫之」という」と注する(こ

の条、正しくは郭注では「…因其文章不復畫之」である。

つまり、各々の「はた」の色が混じっている（駁）ので、何のためのしるしであるかがわかる故にまた文様（「はた」の意図を示す意匠）を描くことなどを用いるのである。

このように、「𣎵」には個別の「はた」の各条にその様々な實際が詳細に記されている。大きさ（布幅）、色、そこに描かれる意味する文章などを用いるべき人物（身分の者）と用途・建てる場所などがそれである。そもそも²³⁴番目の部首「𣎵」^(714b)とは次のように説かれ、そのような属をここに収める。

「①旌旗之游𣎵蹇之兒②从巾曲而坐③讀若偃④古人名𣎵、字子游⑤凡…」

①「旌旗」とは旗全般を通じたいい方である。「旌」は羽があるもので、羽がないものもあるが、「旗」「旌」と各々その一つを挙げることによつて九旗を該めるのである。②「从巾」とは（共通成分をもつ）「𣎵」「𣎵」「𣎵」と同意で、「𣎵」に見えるものといういみである。「曲つて垂れ下る（曲而坐下）」とは「游」を象り、「風にはためいて（游）、互いに入出入する」とは「風の吹くにまかせて往復して、丁度出たり入ったりするようにするようだ」という意味である。故に「从入（入）を構成成分とする」である。…玉裁が謂うに、「从巾」は「竿首」で、「下垂」が「游」をいうのである。…

従つて、「勿」およびその唯一の所属字「易」と「𣎵」系の「はた」とは、作字の意図（即ち表わしたい意味）が異なるので、字体が異り、結果やはり別つ建てとして配されているといえよう。

8. ^{上b}₂₃₁趣「①疾也②从走取聲」

①…『周禮』「趣馬^{ソウバ}」で大鄭（衆）は「趣馬、趣養馬者也（王の馬を養う者をいう）」という。按ずるに「趣養馬」は、督促して馬を養わせるという意味である。古音は七口反（ソウ）。音が転じて、そこで清須（シウ）・七句（ソウ）の二つの反切がある。後の人が「歸趣（むかう）」、「旨趣（むかうところ）」というのは、つまり引伸の義である。その場合は、それにつれて七句（ソウ、去声）となり、それで七苟（ソウ、上声）と別けるが、古義・古音ではないのである。

②七句切（ソウ）。古音は四部にある。

ここで反切が意味する音韻的要点をまとめると、今人は「おもむく」は「シウ・シュ」、「うながす」は「シヨク・ソク」「やしなう」は「ソウ」だが、

七口反（齒頭・次清 清母 厚韻上声）段4相当

清須反（齒頭 次清 清母 虞韻平声）段5相当

七句反（齒頭 次清 清母 遇韻去声）段5相当

七苟反（齒頭 次清 清母 厚韻上声）段4相当

となる。段説では「七口反」が古音で古義も表わし、本来は5部ではなく4部にあつたと主張する。

9. ①^{13上b}純 ②^{13上b}絲也 ③^{13上b}从糸屯聲 ④『論語』曰「今也純儉」

①…これは純の本義である。故にその字は「糸」を構成成分としてもつ。按ずるに「純」と「醇」^{ジュン}とは音が同じである。

^{14下a}「醇」^{35a}とは「不澆酒也」^{うすくないさけ}で、「純」を段りて「醇」^{ジュン}（のいみの）字とする。…美絲・美酒は、その襍^{まじ}らない点では同じである。…襍^{まじ}らなければ「壹」^{イツ}（ひとつ）で、「壹」ならば「大」である。……

②^{10上a}駁 ③^{10上a}馬色不純 ④^{10上a}从馬爻聲

①「純」^{ジュン}は「醇」^{ジュン}に同じ。崔覲は「不襍曰純（まじらないのは「純」という）」という。…これを引伸して凡そ色が不純（まじりけがある）である^{いい方}俾とする。②北角切（バク）。古音は2部にある。

段注が色彩（文様）と人の心理とに関連して述べるこの段は興味深い。こう主張する根拠は未だ見出し出していないが、あるいは経験に基くものであろうか。そうであればなおさら人の心の不変なることを説いた点で、一層興味を覚える。まだら文様は落ち着かない気が確かにする。

9. ①『韻會』（五勿・入声）の「勿」に引く『説文』に拠る。

勿、州里所建旗、象其柄三游、雜帛幅半異、所以趣氏、故冗遽稱勿勿。

②^{下b}2^{下b}13^{下b}遽「傳也」③「迫也」④「从足康聲」であるので、この段注は③の別説をとったことになる。

⑤「窘」は「迫也」である。⑥其倨切（キヨ）。5部。

また、^{下b}7^{下b}22^{下b}窘は「迫也」⑦从穴君聲（渠隕切、13部）であるからである。

③^{下a}7^{下a}10^{下a}冗「𡵓也（ひまである）。从儿⑧人在屋下、無田事也⑨『周書』曰「宮中之冗食」

⑩……「儿」はつまり人である。会意。而隴切（ジョウ）。9部。⑪会意の𡵓（いみ）を説く。

ここでは段注も「あわただしい」意について述べないが、『韻會』が「冗遽」の意で「せかす・いそがしい」とすることに基くであろう。それ故に二音節の表現で「冗遽」、「勿勿」としてある。

10. この二字については段注はしばしば誤用を戒める。

①^{上b}8^{上b}18^{上b}𡵓「揚也」②从人𡵓聲

③「揚」とは「飛び挙がる」である。『爾雅』「釈言」に「𡵓、舉也」という。……凡そ古くは「𡵓舉（あげる）」・「𡵓謂（いう）」という場合の字は、皆にこのように作った。……（ところが）「稱」が通行して「𡵓」は廃れてしまった。（本来）

「稱」とは今の「秤」^{はかり}の字である。④處陵切（シヨウ）。6部。

②^{上b}7^{上b}51^{上b}稱「銓也从禾𡵓聲……」

③……「稱」は俗に「秤」に作る。按ずるに、「𡵓」は「并舉（あわせてあげる）」（^{下b}4^{下b}2^{下b}）であり、「𡵓」は「揚也」である。今は皆に「稱」を用いる。「稱」が通行して「𡵓」・「𡵓」が廃れてしまった。④處陵切（シヨウ）。6部。

従って、本来は「𡵓」を見るべきである。

③^{下b}4²再「一併舉也。从爪、𠂔省」

①…凡そ「手で挙げる」は、字は当然「再」に作るべきである。凡そ「^{あげる}併揚」は当然「^{はかりではかる}併」に作るべきで、凡そ「銓衡」は当然「稱」に作るべきである。(しかし)今、字は(全て)通して「稱」を用いる。處陵切(シヨウ)。6部。

段注は説かないが当然三字が通じてしまった背景には「同音」である事実がある。反切を示してそれを述べたものである。

11.^{上b}15⁶の叙に「六曰假借。假借者、本無其字、依聲託事、「令」、「長」是也」とあり、その段注および他の段注でも、しばしば仮借の凡例として「子」は挙げられる。

^{下b}14²²子「十一月易氣動、萬物滋②人目爲僂③象形④凡子之屬皆从子」

①…凡そ「以爲」というものは皆許君(許慎)の六書の段借の法を^{やりかた}発明するのだ。(つまり)「子」は本来「陽の気が動き、萬物が滋る」場合の^{いい方}僂である。萬物は人より靈(本質的でふしぎ)であるものはない。故に^か段借りて「人」の僂とするのである。②物が滋り生ずる形に象ると同時に人の首と手足がある形に象る。即里切(シ)。1部。

叙という假借とは「同字異義」即ち本来その字はないが発音上の類似に依って仮りにある字を用いる。しかし、「子」条ではむしろ字義の引伸から仮借となることのみが表面上論じられているように見える。そして、「勿」の場合、「はた」(のありさま)の意を引伸した「せかす」からその意で用いられるので仮借という点、叙でのべる仮借の定義そのものではない。従って、叙でなく「子」を段注があげ、そこで述べる仮借説によつて読者が理解できるよう導いていると考えられる。これはつまり、「遽」(其倨切、5部)が「あわただしい」、「亢」(而隴切、9部)、「勿」(文弗切15部)がはた↓その色がブチであるので人心をせかすために用いる↓「あわただしい」意に用いるというのが、段氏の古音説では5・9・15部は通じないからで、意味をもつて通じるとしななければならないために他ならない。

2. 下^b方⁸⁶ (方)

- ① ならべ併せた船である。
- ② 両つの舟の頭^{へさき}を総めあわせた省略形に象る。
- ③ 凡そ「方」の属は皆て「方」を構成成分としてもつ^{ハ1V}。

A 汭 (汭) ① 「方」は或いは「水」を構成成分としてもつ。

〔段注〕

① (『詩』) 周南 (「漢廣」) に「不可方思」、邶風 (「谷風」) に「方之舟之」とある。『爾雅』「釈言」及び (「漢廣」の) 毛伝では、皆に「方、汭也」という。今『爾雅』は「方」を改めて「舫」に爲るが、(それでは) この義^{いみ}ではなくなった。(なぜなら) 「併船」とは両艘の船を並べて一つにするからである^{ハ2V}。(また) 「汭」^{上² 下¹¹ 20b}とは「木を編んでそれを手段として「渡し」とする」ので、「併船」とは異なるものである。

どうして毛伝は「方」を釈して「併船」といわず「汭也」というのか。「併船」といえば、木を編んでその用^{はたらき}は略ぼ同じである。故に (漢廣・谷風) 俱に「方」と名づけることができるのである。方舟は大夫の行^{きまり}う札となるが、『詩』では必ずしもいわないものであるから、この場合釈すには汭をばもってしてもかまわないことになるのだ。

許慎が字 (の成り立ち) を説明する場合はというと、つまり 下方は「舟」の省略形を構成成分とし、しかも上方は並べた頭があるさまとすると見る^{わか}。故に「併船」が本義となり、「編木」が引伸の義となると知れる。

さらにまたこれを引伸して、「比方」^{くらべる}となる (『論語』憲問) 「子貢方人」がその例である。(また『詩』) 「秦風」(黄鳥) 「西天^{ハ4V}之防」で毛 (亨) が「防、比也」というが、「防」^{ハウ}は他でもない「方」^{ハウ}の假借であるといういみである。

さらに又これを引伸して「方圓（の方）^{しかく}」とし、「方正^{ただしい}」とし「方向^{むき}」とする^{△5V}。

さらに又假借して「旁^{ハウ}」とする。（その例は）「上」部に「旁、溥也^ハ」という^{△6V}。凡そ今文尚書が「旁」に作るものは、古文尚書では「方」に作り、「大」（のいみ）とする。（その例は『詩』大雅）「生民」で「實方實苞」で毛（亨）が「方、極畝也」という。「極畝」は「大」の意である^{△7V}。

さらに又假借して「甫^{フホ}」とする。（『詩』召南（鵲巢）で「維鳩方之」とあり、毛は「方之、方有之也」という。「方有之」とは「甫有之」のようである^{△8V}。

②「兩」は当然「兩」に作るべきである^{△9V}。（篆文の）下方は二艘の舟が併さつて一つとなつたさまに象り、上方は一艘の船の頭が一ところに總まるさまに象るのである。府良切（ハウ）。10部。（玄應『一切経音義』が引く）『通俗文』に「連舟曰舫」とあるが、許慎が字を解説するのと同じではない。多分「方」が正字で、（その義^{いみ}に）俗に「舫」を用いるからであろう。

〔注〕

1. 310番目の部首で、ここに属するのは「舫」一字のみ。紱で部首は字形により系聯すると説かれるが、むしろ字義によつて系聯すると思われる部首が配されることがあるのはこれまで述べてきた如くである。その点で、紱で段注が引く287番「人」に始まる八篇とは、一つの典型と考えるべきである。即ち、形・意味双方に關した部首が並ぶと考えられる。「方」とは正に「人」そのものではないが、そのくらしに關する「のりもの」である。七篇の末「𠂔」を蒙けず「人」から始まる八篇には、「ひと」の人体にかかわる部首が形を蒙けつつ続く。人が臥した306「尸」を蒙け、308屨となり、それが「舟」を成分として含む故に309「舟」となる。そして「舟（月）」を蒙け「方」が次る。この後では再び287「人」を蒙ける311「儿（儿）」に戻る。以下「ひと」系の部首のみ続く。よつて、「方」は字形の上では「屨」——「舟」とのみかわり、「人のくらし」に因

んで次でた部首といえる。

2. ①周南「漢広」では三章、章ごとに八句の全章で後半四句に含まれ繰り返されるが、毛伝は一章目で「方、汙也」という。なお「汙」の校勘記では「柎」に作る諸本があったとした後、「按依説文作汙、是」とする。（後注参照）段説と合う。

②邶風「谷風」は、六章章ごとに八句の四章目。

就其深矣 方之舟之 就其淺矣 泳之游之

毛伝は何もいわず鄭箋に「方、汙也」とある。

③釈言「舫、汙也」で注は「水中箴筏」、疏は孫炎説『方言』・「漢廣」・『論語』（後注参照）などをひき、「舫・方・汙・桴、音義同」と結ぶ。よって段説に合わず、従って注疏に触れず①・②と異り「非其義」の例としてあげたのみといえる。

③また同じく「釈言」の前段に「舫・舟也」とあり、郭注「竝兩船」、また刑疏は「。釈曰謂「竝兩船」、「釈水」曰「大夫方舟」という。なお、郭注「竝」の校勘記では「釈文が「併」字に作る」としたあと、「按「釈水」「大夫方舟」注亦云「併兩船」、此作「並」、非」という（後注④参照）。

④「非其義」の主な根拠は、「方」部に先立つ「舟」部_{下b}に舫があることに因ろう。

「①船也②明堂月令曰舫人③舫人、④習水者⑤从舟方聲」

②…「舫」は祇だ「船」と訓むので「舫人」はつまり「習水者（水に習れ親しんだもの）」と訓む。…『玉篇』（舟部二八三）・『廣韻』（去声四十一漾韻）は皆に「舫、並兩船（両つの船を並べる）」というが、これは是に「船」をば「方」であるとしたかに認めているのである。（しかし）「舫」が通行し「方」の本義が廃れてしまった。（そして）「舫」の本義も同様に廃れた。『爾雅』「釈言」（前段に）「舫、舟也」というが、その字は「舫」に作り誤っていない。さらにまた（段注に）「舫、汙也」というが、その字は当然「方」に作るべきである。俗本が「舫」に作る。（また『爾雅』「釈水」「大夫方舟」も同様に或いは「舫」に作る。そうであれば則ち『毛詩』（毛伝）「方、汙也」と相_あ応_わない。

愚は嘗て『爾雅』は一書を通じて俗字が多く古えの經書と相応ないと（いういみのことを）いったことがある。それは『爾雅』を習う者たちが勝手な憶測によつてしばしば改めたことが理由なのである。…②（『子虚賦』『榜人歌』で）張揖がいうところの船長である。…⑤甫妄切（ハウ）。10部。

このことから、段氏の『爾雅』一書についての認識が立説の根拠として根底にあるといえる。故に『皇清經解』の校勘者たちは段玉裁の説を評価した結果、各条でそれを引くのであろう。

なお、『毛詩故訓傳』の同「谷風」では次のように記される（本来双行の注である）。

…舟、舩也。方、汭也。已見周南（『漢廣』）、此不再釋、凡讀毛詩者、常知此。

方、汭也 說文曰方、併船也。汭者編木以渡亦是併船之類。

3. ①『爾雅』『秋水』は段落ごとに示す。

「①天子造舟②諸侯維舟③大夫方舟④士特舟⑤庶人乗汭」

注は各々「①比舩爲橋…②維連曰舩③併兩舩④單舩⑤併木以渡、汭音桴」とある。疏は次のようにある。

「…言「造舟」者比舩於水加版於上、卽今之浮橋。故杜預云「造舟爲梁」、則河橋之謂也。維舟以下則水上浮而行。但舩有多少爲差等耳。云「庶人乗汭」者、『詩』『漢廣』云「（省く）」毛伝云「方、汭也」。「秋水」云「舩、汭」。郭注云…『論語』曰「乗桴浮於海」注云「桴編竹木、大曰楫、小曰桴」、是也。桴・汭音義同。

また「舩」の校勘記には「注疏本「舩」誤「舩」とある（前注②参照）。

②^{11上20b}汭「①編木以渡也②从水不聲」

①「周南」（漢広）「江之永矣 不可方思」で（毛）伝は「方、汭也」というのは、即ち（『爾雅』）「秋水」の「舩、汭也」である。（なぜなら）『爾雅』では字体が多く俗の用法に従うだけであるからである。（また同）「秋水」で「大夫方舟、士特舟、庶人乗汭」という。『方言』（九）では、「汭謂之稊、稊謂之筏。筏、秦晉之通語也」という。『廣韻』（十三佳韻・

十月韵・十虞韵)では「大曰稗、曰筏、小曰汴」という。按ずるに『論語』(公冶長)「乗桴于海」では「桴」を假りて「汴」とする。凡そ竹・木・蘆、葦は皆て編んでこれを爲ることが出来る。今日、江蘇・四川の語では「稗」という。(二)芳無切(フ)。古音は4部に在る。

⁶₃₁上桴は「(一)桴棟也(二)從木孚聲(附柔切(フ)、3部)」で、段注は「棟前が「桴棟」といい、棟の前の近くがまゆのようである」というのみで、「いかだ」の意については述べない。即ち、前注2の③「釈言」で注説は「同音同義」というのは段説に合わなかったために触れないと述べたが、その一つの理由はここで「假借」であるからと考えられよう。

方、府良切 10 二つを合せたふね (非 清)

舫 甫妄切 10 ふね (非 清)

汴 芳無切 4 丸太を組んだいかだ (敷 次清)

桴 附柔切 3 ? (うかぶ) いかだ。(奉 濁)

つまり、方・舫は同音(同部)仮借である。汴・桴は仮借として通じるが、方・舫とは、「双声」によって通じるのみである。

△付記▽

①「愚嘗謂爾雅一書多俗字、興古經不相應」について。

¹¹₂₀上²下でも「俗字」が『爾雅』には多いことをのべるが、『爾雅』を立説の根拠とするべき場合、常にやっかいな問題となったであろう。故に、しばしば注中で漏らしたことが想像される。ただ、「舫」条で「嘗」とある点は畢生の大著の製作過程(作成順)を考える上で、興味深い表現である。ここでは、篇次と時間的前後の関係が一致する。

②段注がしばしば当時の方言を引くことを筆者は指摘してきた。この場合は共に金壇に生れた段玉裁自身が自ら親しく知るものである。『段玉裁先生年譜』によれば、乾隆35年(1770年)36才の時に四川・玉屏県の知県として赴いてより同42年(1777

年)から成都で候補の任に当たっていたが、45年(1800年)「疾いと稱して帰った」のである。その間、『説文解字讀』『古文尚書撰異』などの著述を完成させた。つまり、段注著述のための「根拠」を求めつづけたと明らかに想像される。

4. ①⁸⁴³_{上b}比は助辞であるので詳細は本稿の条参照。

「①密也②二人爲从、反从爲比③凡比之屬…」

①…「密」の義に要めれば、それで括るに十分であり、その本義は対象に親密^{したしむ}といういみである。その餘^{ほか}の義は…皆てその引伸されたものである…

従つて、ここでは「対象と親密^{ちかい}である」の引伸義となる。

②『論語』憲問「子貢方人。子曰賜也、賢于哉。夫我則不暇」。なお和訓では「タクラブ」とよれる。

③秦風・黄鳥は三章で章ごとに十二句で、その二章目。

「交交黄鳥、止于桑。誰從穆公、子車仲行。維此仲行、百夫之防」で毛伝は「防、比也」。

5. ①「しかく」の例は『孟子』『離婁』の「孟子曰規矩方員之至也」や、『大戴礼記』他に「天圓地方」など多く見える。

②「ただしい」は「品行方正」などと用いられ、『漢書』『武帝紀』に「…故詳延天下、方聞之士」で顔師古は「方謂方正也」と注する。

③「むき(ゆくさき)」も多様される例である。『論語』『里仁』に「遊必有方」とあるのもその例である。

6. ①¹³_{上a}旁^{ハナ}「①溥也②从二關③方聲」

①司馬相如の「封禪文」で「旁魄四塞」という。(その注で)張揖は「旁、衍也」という。『廣雅』(釈詁)は「旁、大也」という。按ずるに、「旁」は「滂^{ハナ}」のように読み、「溥^ホ」と双声である。…③步光切(ハウ)。10部。

②²_{上a}溥^ホ「①大也②从水專聲」

②滂古切(ホ)。5部。

③^{11上²a⁴}滂^{ハウ}「①沛也②从水旁聲」

②普郎切（ハウ）。10部。

以上3例から、旁と滂は同じ10部で、5部の溥とは双声である。

④『尚書』で古文が「方」に作り、今文が「旁」に作る例は、「堯典」「共工方鳩僝功」の同条が『史記』『五帝本紀』では「共工旁聚布土」となるものがある。

古文、今文の問題も段注ではしばしば論じられる。段氏『古文尚書撰異』^{38a}の「堯典」「共工方鳩僝功」で、次のように詳述される。

玉裁按「方鳩僝功」者古文尚書、「旁速孱功」者今文尚書也。『説文』八篇「人」部引「虞書」「方殺僝功」、此僞古文也。：二篇「疋」部引「虞書」「旁速孱功」、此僞今文也。凡古文尚書作方、凡今文尚書作旁。：『廣雅』『釋詁』曰「方、大也」、此今文家説也。又曰「旁、大也」、此今文家説也。：參稽互證知許書僞古文而不廢今文矣：

同書の序では乾隆47年（1802）成書であるので、段氏48才の時、この今文・古文説は既に完成していたことになる。

⑤大雅「生民」は八章四章で章ごとに十句、四章は章ごとに八句で、その五章目、五句目。「延后稷之穡 有相之道： 實方實苞 實種實稊：」その毛伝は「方、極畝也」である。他に注は見えず、これから直ちに「方」が「大」とは結びつかないように思う。従つて、「旁」に仮借した「方」と解し、その上で「おおきな畝」とこの段注は読むべきであろう。^{6上³¹a}極の段注から引伸義の延長上に幾らか「おおきい」意が認められようか。些かわかりにくいのではないか。

^{6上³¹b}亟「①棟也②從木亟聲」

①：引伸の義は凡そ「至高遠（至つて高遠である）」で、皆てこのことを「極」という。

7. ①^{3下⁴³b}甫「①男子之美稱也②从用父③父亦聲」

①つまり「甫」とは字ではない。^{あさな}凡そ男子は皆これを稱うことができる。それで男子が始めて冠する稱であることによつ

て、引伸して「始」となる。さらに又引伸して「大」となる。②…方矩切（フ）。5部。

よって、明らかに説解が説く本義ではなく、段注でいう引伸義の「はじめ」をさす。

②召南、鵲巢は三章、章ごとに四句で、その三章目。

「維鵲有巢 維鳩方之 之子于歸 百兩將之」で、毛伝は「方、有之也。方、有之也。一本無「之」字。…

「方」の校勘記では段玉裁の説を引いて次のようにいう。正に段注と符号する。

…段玉裁云「之」がないという一本は誤りである。傳は当然「方之、方有之也（これを方つ）は「方てこれを有つ」というべきである。…皆に經を引くが、附された傳は時に刪られるからである」。

また、『毛詩故訓傳』の同条には次のようにあり段注の説が明確になる。段氏の專著を参照する意義の大きさを思う（本來は双行の注）經

…方、有之也。「方有之」猶今人云「正有之」。俗本以「方」逗、以「有之」句、大失詩意。

8. ①^{7下}_{39a}兩「一再也②从口③从从④从一⑤易日參天兩地⑥凡…」

①…凡そ物が二つあれば、その字は「兩」に作り「兩」に作る。「兩」とは「二十四銖」の併であるからである。今日は字体は「兩」が通行し「兩」が廃れてしまった。②…良獎切。10部

②^{7下}_{39b}兩「一二十四銖爲兩③从一兩④兩、平分也⑤兩亦聲」

①…按ずるに「兩」とは黃鍾兩つの重さである。故に「兩」を構成成分としてもつ。…④良獎切。10部。

△付記▽

この段注で触れなかった「ふね」について述べておき相違を示す。

①^{8下}_{4b}船「一舟也②从舟台聲」

①（船と舟）二つの篆文は転注となる。古くは「舟」といい今（漢代）は「船」という。丁度（八篇の「舟」にちなみ同

篇でいえば、はきものを）古くは「屨」といい、今は「鞋」というようなものである。「舟」の意と発音とをまとめていえば「周旋（の周）」である。「船」の意と発音をまとめていうと「汧沿」（の沿）」である。①…「口」部に「合」字があり、「水」部に「沿」字があるので「合聲」である。…食川切（セン）。14部。

②^{下a}₈₄舟「①船也②古者共鼓、貨狄剡木爲舟、剡木爲楫、以濟不通③象形④凡…」

①「邶風」（谷風）「方之舟之」で伝は「舟、船也」という。今人は「舟」といい、漢代の人は「船」ということである。毛亨は（漢代が）今の語で、古語を解釈したわけである。故に「舟」は他でもない今の「船」であるというのである。（同じ邶風の前段にある）「伯舟」の条で伝をつけず（邶風の）ここで伝を付すのは、これによつて「方」が「汧」となり「船」ではないと見たためである。②郭注の『山海經』（海内經）に「世本では共鼓、貨狄は「舟」を作った」という。『易』「繫辭」では「木を剡りき「舟」を爲り、木を剡り楫を爲った。舟と楫の利で、それによつて不通のところを済った。（よつて）遠いところに致ったので、それで天下を利った（天下に利益を与えた）。多分これを「渙」③（「風」が「水」を吹きちらす）」に取ったのであろう」という。共鼓・貨狄は黄帝・堯舜時の人であり、貨狄は他でもない「化益」ではないかと疑う。「化益」とはつまり「伯益」である。「考工記」（序官）では「故書は「舟」は「周」に作る」とある。③職流切（シウ）。3部。

3. ^{12下b}₃₀母（茂）

①止める言である。

②「女」と「一」とを構成成分としてもつ。

③「女」には姦者がいるが、「一」で禁止し姦させないようにする。

④凡そ「母」の属は皆「母」を構成成分としてもつ。

〔段注〕

①「𠂔」は『禮記』（曲礼）の釈文に依つて補う^{△2V}。「𠂔」とは「意内而言外也」である^{△3V}。（よつて）その表現したい意が禁止であれば、（口から外に出た）その言は「𠂔」というのである。

古は「無」に通じて用いられた^{△4V}。「詩」・「書」では皆に「無」を用いる^{△5V}。（『儀礼』）「士昏礼」の「夙夜毋違命」では、注をして「古文毋爲無」という^{△6V}。これは古文礼では「無」に作るが、今文礼では「毋」に作るということで、漢代の人は多くの場合「毋」の方を用いたということである。故に『小戴礼記（即ち漢の戴聖の礼記四九篇）』・『古文尚書』は皆「毋」を用いた^{△7V}。（しかし同じく漢代）の『史記』はといえば竟に「毋」を用いているが有無（のいみの「無」）の字となつた。又按ずるに『詩』（角弓）は「毋教猷升木」で、字体は「毋」に作り、鄭箋は「毋、禁辭」とある^{△9V}。

②会意。武扶切（ブ）。5部。

③（大徐・小徐の）各本は但だ「从女有奸之者」の六字があるだけなので、今（女一、一、禁止之令勿姦也）十字を補う。（そのうち）「禁止之令勿姦」がここでは「一」に従う意を説くからである。（なぜなら）「毋」と「乍」とは同じ意だからであり、「乍」の下で「止也。从亡一、一有所礙之也」というからである。そうであれば則ち「毋」の下でも同様に当然「从女一、一有所礙之」であるべきで、その義は互いに證となることができるからである^{△11V}。（『儀礼』）「曲礼」釈文・（『尚書』）「大禹謨」の正義は皆に『説文』を引いて「其字从女、内有一畫、象有姦之形。禁止之勿令姦。古人云毋、猶今人言莫也」というが^{△12V}、これは己の意をばもつて（説解を）増改し、そうして許慎の（本）意を失つた。（なぜなら）多分、許慎は「禁止勿姦（禁止して姦させないようにさせる）」（意）でもつて「一」に従うことを説くが、（しかし）陸徳明・孔穎達は「姦す者がいる」（意）でもつて「一」に従うことを説くからである。（つまり）「女有姦之者」五字が、「从一」となり、それでもつて禁止の張本（伏線）となることを知らないからである。（このような）唐代の人の増改・今（みる）本の奪落は皆に繆りである。しかし、唐本はそれでもつて今本を正すために摘ることができるのである^{△13V}。

〔注〕

1. 444番の部首である。443番が「女(𡚢)」で、これを蒙け次るが、445番「民(𡵓)」はこれを蒙けず、以下字形上関連がない部首が続く。所属字は毒一字のみである。

2. 「曲礼」「曲禮曰毋不敬」の陸徳明の釈文に次のようにある。

陸曰、母音無。『説文』云「止之詞。其字從女内有一畫。象有姦之形、禁止之勿令姦。古人云母猶今人言莫也。」(後述参照)。

3. ^{9上b}₂₉ 𡵓は特に転注に関し重要な説解用語で、段注では屢説かれる。二篇「言」部ではなく「司」部にあるので、「言」を「司」^{コントロール}と読め、会意である意図が大いに認められる。拙稿『読段注 助辞ノート(一)』(『二松学舎論叢』2003)他参照。

4. 無は助辞であるので稿を改め詳述するので、母と関わる段のみ今は訳出する。

^{12下a}₄₆ 𡵓「〇己也〇从亡森聲…」

① 凡そ失う対象となるもの、まだ所有していないものは、皆て逃亡^{にげる}その状態であるようだとということである。これは有無(の無)の字体の正体であるが、俗に「無」に作る。…②武夫切(ブ)。5部。…

5. ①『詩』が「無」を用いる例は、後述参照。

②『書』が「無」を用いる例。

洪範「凡厥正人…于其無好徳…」

6. 士昏礼

「對曰、其固敬具以須、父送女、命之曰戒之敬之、夙夜毋命」の鄭注に「…古文母爲無」とある。その賈公彦の疏は「…云「古文母爲無」、不從者以『説文』母爲禁辭、故從經今文母爲正也」とある。

7. ①『(小戴)礼記』が「母」を用いる例。

「檀弓」下「國昭子之母死。…曰、噫、母。」

注に「噫、不寤之聲。母、禁止之辭。……母音無」とある。

②『今文尚書』が「母」を用いる例。

「大禹謨」「禹拜稽首回辭。帝曰母^マ。惟汝諧」の注に「言母所以禁其辭…」とあり、疏は「…「帝曰母」、母者禁止其辭也。…」とある。

8. 『史記』が「無^{なし}」の意に用いた例は「五帝本紀」に「洪範」を引いた条に見える(前注5参照)。「于其母好德」とある。その『尚書』は「凡厥正人…于其無好德、…」。

9. 『詩』魚藻之什「角弓」は八章章ごとに四句で、その六章曰。

「母教猥升木 如塗塗附 君子有徽猷 小人與屬」で、箋に「母、禁辭」とある。

ところで、古注はこの詩は父兄が幽王を刺るとし、それは「讒佞を好んだ」ためであつたという。「好讒佞」とは「母」字の解釈に用いる證としてふさわしく思われる。

10. ①大徐本「止之也。从女有奸之者。凡母之屬皆从母」。

②小徐本「止之也。從女有奸之者。凡母之屬皆从母」。いずれも「指事」と解す。

11. ^上₁₁「一」は本来「惟初大極、道立於一、造分天地、化成萬物。凡一之屬皆从一」であり、六書では「文」で指事に当る。しかし、これまでしばしば見てきたように、様々な文字に於いては、構成成分となるとその都度変化し、その文字にふさわしい具体的な字義をもつ。(拙稿『助辞ノート(一)』『文(二)』他参照)。筆者は、このように適宜具体的な意味となること、広く通用する点が「文」たる指事の本質ではないかと考える。

②^{12下b}に姦は次のようにある。

「^{わたくしする}ムである②三人の女を構成成分としてもつ」

①…「ム」(^{9上b}_{43b})下に「姦(表^マ)也」というので、二つの篆文は転注となる。引伸して凡そ「姦^{カン}充^{キョウ}」の僞^{いい方}となる。俗に「奸」

に作る。(よつて)その後竟に「奸」字を用いる。②「三女」は「^{みだら}姦」となり、また同時に「三女」は「姦」となる。是に

(『論語』子罕・衛靈公の条、また『孟子』告子章句上のように)「君子は色を遠ざけ徳を貴ぶ」とするわけである。古顔切(カン)。14部。

③助辞の乍(^{12下b}_{45b})は稿を改め詳述するので、母と関る条のみ訳出する。

「①亡げるのを止める^言②「亡」と「一」とを構成成分としてもつ③「一」は、礙る何かがあることである」

①…「言」字を補うことは、例えば「母」下で「止言也」というように、同様に本来は「言」があつたのに後人が刪つた例であるからだ。「乍」と「母」とは同じ意だ。「母」とは「ある人が女を姦すが、一ちにこれを止めさせる」(という意味だから)で、その言が「母」というのである。「乍」とは、「ある人が逃亡^{にげ}るが、一ちにこれを止めさせる」(という意味だから)で、そのときの言が「乍」というからである。皆に驚き咄咄^{トットツ}と人に逼る語である。……②会意。鉏駕切(サ)。古音は5部に在る。③「礙」とは「止也^{とめる}」である。「一」に従う意を説く。「母」字は「一」に従うが、また同時に是れはこれを礙る何かがある意である。

12. いずれも「唐人」である。

①「曲礼」の陸徳明(556〜627?)の釈文は前注2参照。

②前注7の②で引く「大禹謨」の孔穎達(574〜648)「正義」は次のようにある。

。正義曰『説文』云「母、止之也。其字從女、内有一畫。象有姦之者。禁止令勿姦也。古人言母猶今人言莫」。是言母者所以禁其辭、令勿辭

また、助辞「莫」は関連する段のみ今は訳出する。

^{下a}莫^{ボ・バク}「^{太陽}日^{まさ}が且に冥くなろうとする①「日」を構成成分とし（それが）「𠂔」（むらがり生えるくさ）」の中に在る③「𠂔」（模朗切。10部）はまた同時にその発音」

①…引伸の義は「有無」の「無」となる。③…莫故切（ボ）又は慕各切（バク）。5部。

この段注で、時代ごとに用例が変化し、従って通用する文字に言及する。段説では、

毋 武扶 5

無 文甫切 5

莫 莫故切 又は慕各切 5

乍 鉏駕切 5

のように全て5部の文字であり、同部仮借故に通用する根拠となるのである。尚、𠂔とは双声による。

13. 「唐人増改」「今本奪落」については、段注ではしばしばのべることであるが、まとめて「価値」とみえるように言及することは頻繁ではない。よって、古人の注解についての一つの見解として注目すべきであろう。これについて『周禮漢讀考』「司常」に見える段を参考にあげておく（前「勿」条参照）。

「帥都建旌」注「帥都郷遂大夫也。都民所聚也」

案、此經注帥字今本皆誤作師。賈疏且云……、故謂之師都、則其誤在唐以前矣。阮注意正謂郷遂大夫帥領民聚之都。……今本誤亦同唐以前俗字。……

このように、常に文字の三属性について「問題」がある。「通用」や「仮借」を考えるに当り、取るべきもの、除外すべきもの、この両者を決めるためには、まず正に『説文』の「体例」をたてることをおいてないように思われる。それを以てのみ、自説の展開が可能となろう。

〔主要参考文献〕

- 頼惟勤『説文入門』大修館書店 1982
宗福邦他編『故訓匯纂』商務印書館 2003
近藤光雄『漢字師承記』研文出版 2005
など。